

ゴージャスお宝鑑定家〜「うん、ゴージャス！」32

登場人物

・ 剛田.. 剛田質店の店主。ゴージャスな品物しか鑑定しない。優雅な所作と独特の価値観を持つ。石言葉にも詳しく熱く語る。

・ 白金.. 剛田質店の見習い鑑定士。一般的な価値観を持つ常識人だが、剛田に振り回される。ツッコミ役。

・ 依頼人.. 怪しげな風貌の男。祖父から伝わる家宝であるエメラルド製の薪割り用斧を持参。

シーン1: 剛田質店の朝

場面設定

剛田質店の店内。豪華な装飾品が並び、剛田が優雅に紅茶を飲んでいる。白金は帳簿を確認しながら、剛田の言動に振り回される。

台本

剛田…(ティーカップを掲げ、深呼吸)

「うん、ゴージャス！この朝の光、そして私の愛するダイジリンの香り…。これぞ、ゴージャスたるものの朝だ！」

白金…(帳簿を見ながら)

剛田さん、朝からテンション高いですね…。紅茶飲むだけで『ゴージャス』って言うの、毎日ですけど、何がそんなにゴージャスなんですか？」

剛田…(目を閉じて語り始める)

白金くん、ゴージャスとは、物の価値以上に、その存在が放つ輝きなのだよ。たとえそれが一杯の紅茶でも、優雅に味わえばゴージャスになるのだ！」

白金…(ため息をつきながら)

「いや、それただの自己満足ですよ…。それより、今日の鑑定予定、確認しておきますか？」

剛田…(紅茶を置き、立ち上がる)

「もちろんだとも！ゴージャスな品物が私を待っているのだからね」

白金…(帳簿をめくりながら)

「えーっと、今日は『エメラルド製の薪割り用斧』の鑑定依頼が来ています…。って、何ですかこれ！？ そんなものがあるんですか？」

剛田…(目を輝かせて)

「なんと！ エメラルド製の斧だと！？ それはきつと、ゴージャスの極みだ！ 早速準備をしよう！」

白金…(呆れ顔)

「いやいや、斧って薪割りに使う道具ですよ？ エメラルドなんて割れやすい素材で作ったら、実用性ゼロじゃないですか！」

剛田…(指を天に掲げて)

「白金くん、実用性など些末なことだよ！ ゴージャスたるもの、実用性を超越してこそ輝くのだ！」

シーン～：依頼人の登場

場面設定

剛田質店に依頼人がやってくる。風貌が怪しげだが、どこか悲壮感を漂わせている。

台本

依頼人：（重そうな斧を担ぎながら入店）

「お邪魔します…。こちらで、ゴージャスな品物を鑑定していただけると聞いて…」

剛田：（

依頼人：（斧を慎重に置く）

「これが『エメラルド製の薪割り用斧』です。祖父の代から伝わる家宝で…」

白金：（驚愕して）

「本当にあるんだ…。しかも重そう！」

剛田：（斧の輝きに感動し、手を合わせる）

「うん、ゴージャス！このエメラルドの深い緑、そしてこの見事な造形美…。まさにゴージャスの極み」

白金：（冷静に）

「はいはいや、冷静に考えてくださいよ！エメラルドで斧を作るなんて、どう考えても無駄遣いですよ！」

依頼人…(苦笑い)

「確かに実用性はないんですが、祖父が『これこそ我が家の誇りだ』と言って大事にしていたんです。」

剛田…(目を閉じ、感慨深く)

「素晴らしい…。誇りある家宝、それこそが真のゴージャスだ！」

シーン③：石言葉の熱弁

場面設定

剛田が斧を手に取り、石言葉について熱弁を始める。

台本

剛田…(斧を掲げて)

「エメラルド…。その石言葉は『愛』『希望』『繁栄』！この斧はただの道具ではない。持つ者に愛と希望を与え、繁栄を約束する伝説の品なのだ！」

白金…(小声で)

「いや、斧にそんな力ないでしょ…。ただのエメラルドですよ？」

剛田：（無視してさらに熱弁）

白金くん、エメラルドは古代より王族や貴族に愛されてきた石だ。これを斧に使うとは、なんという贅沢！ まさにゴージャス！」

シーン4：剛田、薪を割る

場面設定

剛田が斧の実用性を試すと言い出し、庭で薪を割ることに。

台本

剛田：（斧を持ちながら）

「ゴージャスたるもの、実際に使ってこそ真価が問われる！」

白金：（慌てて）

「いやいや、割れたらどうするんです！？ 剛田さん、やめてくださいってー！」

剛田：（無視して薪に斧を振り下ろす）

「うん、ゴージャス！」

(斧が薪を割り、断面がエメラルドの輝きで光る)

白金…(驚愕)

「え！？なんで断面まで輝いてるんですか！？物理法則無視してません！？」

剛田…(誇らしげに)

「これがゴージャスの力だよ、白金くん！」

シーン5: 鑑定結果と値段交渉

場面設定

剛田が値段を提示する。

台本

剛田…「この斧、間違いなく本物。そしてその価値は…800万円だ！」

依頼人…(驚きつつ感謝)

「そんな高値で…ありがとうございます！」

白金…(焦りながら)

「剛田さん！店の経営が危ないですよ！」

剛田…百金くん、ゴージャスに経営の心配など不要だ！」

シーンの謎の訪問者

場面設定

鑑定の途中で、別の怪しげな訪問者が現れる。彼は剛

田質店の評判を聞きつけてやってきたが、持参した品物

が「ゴージャス」かどうかで一悶着が起こる。

台本

訪問者…(ドアを勢いよく開けて入る)

剛田さん！ あなたの店がゴージャスな品物を扱うと聞い

て、ぜひこれを見てほしい！」

剛田…(優雅に振り返る)

「おや、また新たなゴージャスを求める者が現れたか。さあ、

見せたまえ、君の宝

訪問者…(バッグから何かを取り出す)

「これです！ 私の家に代々伝わる『金箔入りのカップラー

メン』です！」

白金…(驚愕して)

「え！？ カップラーメン！？ それ、ただの食品じゃないですか！」

剛田…(目を細めて観察し、静かにティーカップを置く)
「…これは、ゴージャスではない」

訪問者…(慌てて)

「え！？ なぜですか！？ 金箔が入っているんですよ！」

剛田…(厳かに)

「ゴージャスとは、ただ光り輝くだけではない。品格、歴史、そして存在感が伴って初めてゴージャスとなるのだ！」

白金…(小声で)

(訪問者はがっかりしながら帰るが、剛田はその後「ゴージャス」について熱弁を続ける。)

シーン7: 剛田の過去

場面設定

剛田が自身の「ゴージャス哲学」を語る中で、若き日の彼が師匠との出会いを通じて「ゴージャス」の真髄を学ぶ姿

が描かれる。舞台は、剛田がまだ若手鑑定士だった頃のヨーロッパの古城。

台本

白金…(ため息をつきながら)

剛田さん、いつも思うんですけど、なんでそんなに『ゴージ

ヤス』にこだわるんですか？ 普通の鑑定士なら、もつと実

用的な価値を重視すると思うんですけど。」

剛田…(遠くを見つめながら)

「ふむ、語るべき時が来たようだね…。私がまだ若かりし

頃、何も知らぬ未熟な鑑定士だった頃の話を。」

(画面がフェードアウトし、回想シーンに切り替わる)

回想シーン：ヨーロッパの古城

(若き日の剛田が、古びたヨーロッパの城の中を歩いている。彼は当時、ただの駆け出し鑑定士で、目の前の品物の価値を金額でしか判断できない若者だった。)

若い剛田…(古びた宝飾品を手に取りながら)

「ふむ、このダイヤのネックレス、カラット数は高いけど、デザ

インが古臭いな……。市場価値で言えば、せいぜい100万円
円ってところか。」

（そこに、謎めいた初老の男性が登場する。彼は剛田の
未来の師匠となる人物。）

師匠…（低く響く声で）

そのネックレスを、ただの金額で評価するとは、なんと浅
はかだ。」

若い剛田…（驚いて振り返る）

「えっ！？ あなたは…？」

師匠…（優雅に歩み寄り、ネックレスを手に取る）

私はこの城の管理人であり、ゴージャスの真髄を知る者
だ。君のような若者が、この品物をただの市場価値で語る
とは嘆かわしい。」

若い剛田「

師匠…（微笑みながら）

「ふむ、君はまだ何も知らない。いいかね、このネックレスは
ただのダイヤの装飾品ではない。そのデザインには、18世
紀の貴族が愛した『永遠の愛』の象徴が込められている。」

そして、このダイヤを支える金細工は、当時の最高の職人が手がけたものだ。」

（師匠がネックレスを光にかざすと、細かな彫刻が浮かび上がり、その美しさに剛田は息を呑む。）

若い剛田…「、これは…！ ただの装飾品じゃない…歴史が…宿っている…？」

師匠…（真剣な表情で）

ぞうだ。このネックレスが持つ価値は、金額では測れな

い。ここに込められた物語、職人の魂、そしてそれを身に

着けた者の想い。それこそが『ゴージャス』なのだ。」

若い剛田…（感動して）

『ゴージャス…。』

師匠…「

（師匠が立ち去り、剛田はその場でネックレスを見つめ続ける。）

回想終了…現在の剛田

（画面が現在に戻り、剛田が誇らしげに語り続ける。）

剛田…「こうして私は、ゴージャスの道歩むことを決意したのだよ。それ以来、私はただの鑑定士ではなく、ゴージャスを見抜く者として生きてきた。」

白金…(呆れながら)

「いや、剛田さんの師匠、クセが強すぎませんか？ ていうか、

ゴージャスって結局主観ですよ

剛田…(優雅に微笑みながら)

白金くん、主観こそがゴージャスの本質だよ。さあ、次の

品物を鑑定しようではないか！」

白金…(小声で)

「ほあ…。また始まったよ…。」

シーン8：斧の秘密が暴かれる

場面設定

鑑定が進む中で、斧には驚くべき秘密が隠されていることが判明する。

台本

剛田…(斧をじっくり観察しながら)

「ふむ…。この彫刻、ただの装飾ではないな。何か文字が刻まれている…」

白金…「又字？ どれどれ…」

(白金が拡大鏡で覗き込む。)

白金…「え！？ 財宝は北の洞窟に眠る』って書いてありますよ！」

剛田…(目を輝かせて)

「なんと！ この斧はただの家宝ではない。財宝への鍵でもあるのだ！」

白金…(呆)

(剛田がさらに興奮し、財宝の話に熱弁するが、白金は冷静にツツコミを入れる。)

シーン6：剛田のゴージャス講座

場面設定

剛田が「ゴージャス」の真髓を語る特別講座を開く。依頼人や白金が強制的に参加させられる。

台本

剛田：（ホワイトボードを使いながら）

さて、今日は特別に、ゴージャス講座を開講する！ま

ず、ゴージャスとは何かを定義しよう！」



白金…「いや、そんな講座誰も頼んでませんけど。」

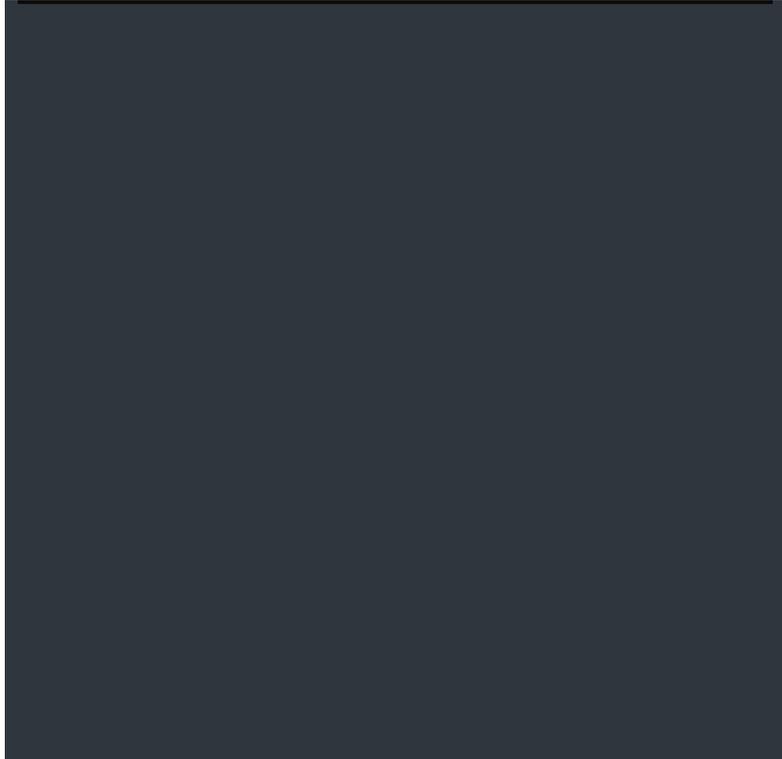
依頼人…(困惑しながら)

「えっと…これは無料なんですか？」

剛田…「もちろんだとも！ゴージャスを広めることが私の使

命だからね！」

(剛田が熱弁を振るう中、白金と依頼人は徐々に疲れていく)



シーン10：エメラルド斧の展示会

場面設定

剛田が買い取った斧を店内に展示し、地域の人々を招待して「ゴージャス展示会」を開催する。

台本

剛田：（斧を高々と掲げて）

見よ、この輝き！ これぞゴージャスの極み！」

来客A：「す「いいけど、これって本当に使えるんですか？」

白金：（小声で）

「使えないどころか、剛田さんが筋肉痛になったんです

よ」。

剛田：「ふふ、ゴージャスたるもの、使うことなど些末な問

題だ！」

（展示会は大盛況となるが、白金は相変わらず冷静なツツコミを続ける。）

エンディング

エピソードとして、展示会後の剛田と白金のやり取りを追加。剛田の筋肉痛がさらに悪化し、白金に介抱されるシーンを描く。

台本

剛田：（ベッドで横になりながら）

「うん、ゴージャス…。いや、本当に痛い…。白金くん、湿

布を頼む…。」

白金：（呆れながら湿布を持ってくる）

「だから言ったじゃないですか。無理しないでって。」

剛田：「だが、これもゴージャスの代償だ…。」

白金：「いや、ただの無茶の代償ですよ…。もう好きにしてく

ださい。」